

進取の気運が漲り、近代日本の経済をつくりあげた 日本橋川

—時代を問わずリバーフロントは街づくりの起点—

建築家・都市環境プランナー 一般社団法人まちふねみらい塾
法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員
阿部 彰

江戸城外堀としての日本橋川

徳川家康が入府し、江戸の街づくりの先事業として日比谷入江を埋め立て、城下街の拡張を行った。それまでは日比谷入江や江戸湊と言われた海が内陸まで入り込み、現在の兜町方向に流れていた平川・小石川・石神井川が屢々氾濫を起こし、安全な街づくりが困難を極めていた。幕府は伊達政宗に命じて神田山を切り開き、隅田川に向けて流し替えを行い、神田川を完成させた。城下町を守る治水が整ったことで九段以北の水路を閉じ、日本橋川を江戸城の外堀として完成させた。

徳川の幕藩体制が安定すると、日本橋川は外敵に対する戦略的な機能から、国内各地から江戸湊や隅田川を介して物資を舟で運び、市中に流通させる経済路としての役割が強まった。このように400年の時空を超えた外堀の石垣は60年前に工事した高速道路の下に隠され、水面と地表面の間を繋ぐように、しかも道路の構造を支える柱に切り裂かれた痛々しさを残して存在している。



日本橋川と一橋御門付近の石垣（江戸初期）と高速道路遠方に見えるのは錦橋（3径間 RC アーチ橋 1929 年）撮影 阿部彰

大規模災害が本格的な街づくりに繋がる

こうして日本橋川を話題にすると、どうしても江戸時代に戻して語ることになりがちだが、本稿では江戸から東京に変わる近代にフォーカスして書くが、もう少しだけ江戸を振り返る。

江戸初期には約50年後の明暦の大火によって街づくりのリセットを余儀なくされた。この大火後、幕府は大膽な天下普請を行い、その後200年の街の骨格を完成

させた。時代が進み、明治維新が起こり東京が首都になる幕末直前の1855年に安政江戸地震が発生した。明治初期における経済や都市づくりは西洋を模倣することから始まったが、薩長土肥を旗頭に日本全国から意気軒昂な若者が寄り集まり維新を牽引した故に、安政江戸地震の経験は引き継がれていなかったとしても不思議ではない。

こうして東京になった50年後に関東大震災に襲われた。日本橋川の土木構築物では常磐橋と日本橋や鉄道橋が地震に耐え、付近の建物では日本銀行と東京駅などが残った。地盤が安定している場所では、他にも地震に耐えたものは少なくなかったが、地震後の大規模な火災により木造建物や橋が消失した。この時も壊滅的な被災の後、本格的な都市への街づくりが始まった。

こうして東京の都市づくりは関東大震災後を待つことになり、その復興として建設された多くの構築物は今も現役として存在している。日本橋川に架かる道路橋25本のうち、12本はこの大震災の復興橋であり、その中でも一ツ橋や雉橋など4本は震災後の3年のうちに鉄骨やコンクリートの不燃橋として架けられている。これらは震災復興橋の構造や素材の検討のためにモデル橋として先行して架けたとも言われているが、隅田川で同じ時期に架けられたのは日本橋川河口の永代橋だけであったことから推し測ると、日本橋川沿いの街復興が東京にとって、いかにも大切であったことを物語っているといえるだろう。

近代の経済軸としての日本橋川

日本橋川沿いは江戸から明治に変わる時にも継続して経済の重要な拠点であった。江戸時代から明治の初期までは米が経済の基準となっており、その拠点は隅田川の対岸の佐賀町にあった。そして近代化の風は隅田川を越え、1882年に日本橋川の河口に日本銀行が発祥（1896年に現在地の日本橋本石町に移転）し、日本橋川沿岸が日本の金融街の中心として位置づけられた。

日本の資本主義の父と言われる渋沢栄一は日本橋川をベネチアに準えて、辰野金吾の設計により兜町に渋沢栄一邸を構え、川に面したランドマークをつくった。

当時、茅場町から日本橋までの間に20数社に及ぶ銀行が集まっていたと言われ、日本の近代化経済を牽

引していた。この象徴的な渋沢栄一邸も関東大震災で消失してしまい、跡地には1928年に辰野金吾のライバル建築家である横河民輔の設計で東京株式取引所の関連建物として「東株ビルディング」が完成した。この建物は現在平和不動産が所有する90歳の現役オフィスビル「日証館」である。

2015年に平和不動産から兜町界隈の“水辺の街づくり”について相談を受け、同時にこの建物を見学する機会を得て、外観見学の際に建物とカミソリ堤防の間に足を踏み入れた所、これだけを見れば不思議と言える様式構造物と対面した。



江戸橋より鑑橋遠景 明治期井上探景中央区立郷土天文館「タイムドーム明石」所蔵

興奮する出来事 日証館の調査



堤防(左側)との間に見た構築物は堤防工事をした際に見えていた部分の下半分を埋め立てた。撮影 阿部彰

日頃この日証館の前を通りかかって見たり、日本橋川から船で眺めていた際には、その価値を気に留めることもないレトロなビルとして認識していたのだが、建物の基礎部分に施されたデザインに強く興味を持った。早速平和不動産に図面の提供を依頼したが、一切の図面が残されておらず、諦め掛けていた時に二代目の東京株式取引所の図面の中に紛れ込んで「東株ビルディング」の記載がある一枚の詳細図が見つかった。

半信半疑の中、見れば見るほど次第に興味が湧き上がるこの図面を足がかりに、ビル名を頼りにさらに関係する資料を探すと1928年(奇しくも日証館が完成した年)に発行した「東京株式取引所五十年史」に工事



道路側から見た日証館

歩道に沿った植え込みは竣工時はドライエアの上口があったが、道路側の勾配補正工事でなだらかにしたために溢水するようになり、塞いだ上をかき上げて植え込みになってしまった。1階の全てのアーチの部分には出入り口扉があった



日本橋川から見た日証館

伊勢湾台風の高潮災害を受けて、東京では干満の影響を受ける水路は水門で区画するか、AP+5.5mの高さまでコンクリート堤防による整備を行った。撮影 阿部彰

内容を細かく記述した数頁の資料と、建築学会(1931年丸善発行)が編集した「東京・横濱復興建築図集」の中に「東京株式取引所附属東株ビルディング」として2頁の写真と図面を掲載した記録が見つかり、この建物の設計に携わった横河民輔の流れを汲む横河建築設計事務所からその原稿と思われる立面図も見つかった。

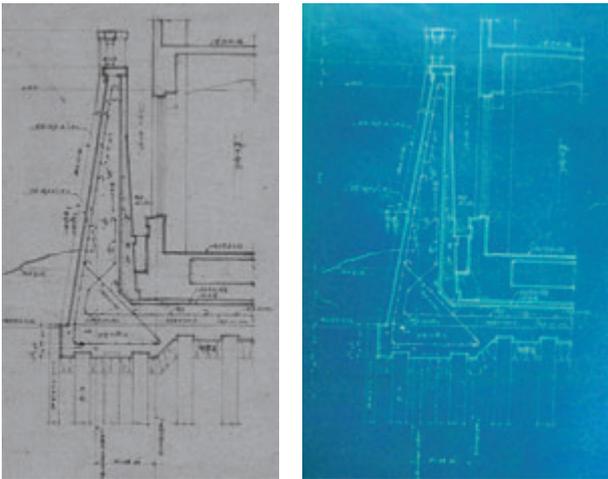
これらの資料を精査しながら、目視・寸法測定・電波探索などによる非破壊調査を実施し、資料との照合を繰り返してこの建物が図面通り特殊なディテールを持つ稀有な建物であることを確認した。

資料解読によると、この建物は長さ50尺・末口8寸の松杭丸太を一尺五寸の間隔で打設したとの記述から、東京礫層に届く深さに打ち込んだ杭の上に、高さ6mのコンクリートの桶状の構造体をつくり、この桶状にできた躯体の内側をアスファルト防水して、川からの水の侵入を防いでいる。(現在でもこの防水は損傷のない状態で保護されていて、川からの漏水は見られない)

この桶状の箱の中に地下1階を含む7階分の建物を建ち上げ、建物と擁壁の隙間から光を呼び込み、風を通過させることで地階にも拘らず事務室と食堂や通気



東株ビルディング(1928年完成)左後方は2代目東京株式取引所
平和不動産所蔵東証旧建物竣工記念写真集より平和不動産所蔵



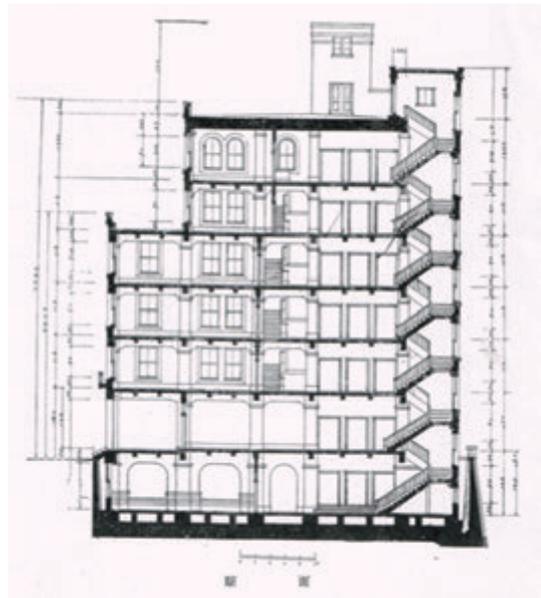
東株ビルディング「護岸壁断面図」と表記された図面が、青写真の状態で見つかった。左側は判読するために、解像度を上げた黒線図にしたもの
平和不動産所蔵

性を保った貸し金庫室などを成立させ、今も環境建築としての設えが整っている。

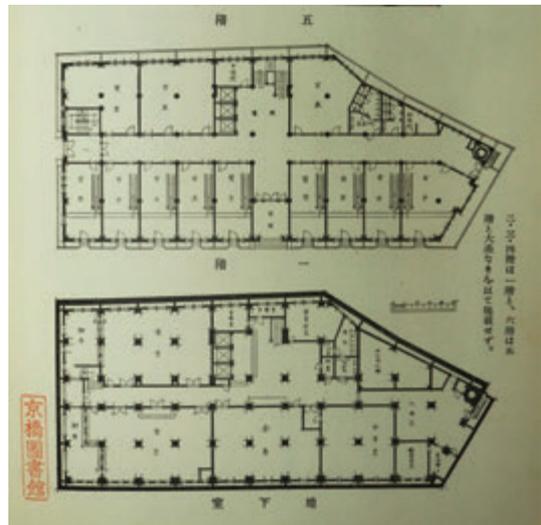
構造的にもコンクリートの躯体の中に鉄骨を挿入していること、設備には非常発電機やオゾン発生機を装備していることから推測すると、建築家横河民輔は関東大震災を体験し、設計する建物の衛生と安全性について熟慮を重ねたと思われる。

しかも構造的・構法的な工夫にとどまることなく、外観を見るとわかるように、上部にはバラスター様のデザイン処理を行って見事な基壇を造り上げ、当時の図面や写真によると、その上には照明器具を設置して、夜間にも魅力的なランドマークとしての演出がされていたようである。この照明器具が点灯して、川面に光り輝く夜景の写真が一枚も残っていないことは残念でならない。

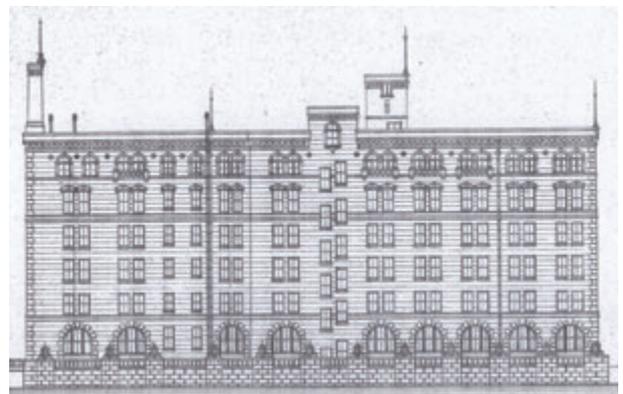
この調査結果をヴェネチアをはじめ世界の水辺都市の歴史に詳しい法政大学陣内秀信教授(現・特任教授・まふねみらい塾塾長)に分析を仰いだところ、この建物のようなディテールはヨーロッパ中のどこの水辺にも実例がなく、地震国である東京の特殊性を考慮した横河民輔の独創によるものであろうと評価された。



東京株式取引所附属東株ビルディング断面図
東京・横濱復興建築図集1931年建築学会編



東京株式取引所五十年史(1928年10月発行)の中に「貸事務所平面図」1階と地下室と書かれた平面図 中央区立京橋図書館所蔵



東株ビルディング竣工当時の北側立面図
基壇部の上に照明器具が整然と立ち並んでいる
横河建築設計事務所所蔵



基壇部のバラスター意匠の詳細破損部分を観察するとモルタルで型抜きした上に人造石洗出しの技法を使って整形し、同じ意匠のものを量産している。下部にある矩形の意匠も同様な技法で製作された。撮影 阿部彰

日本橋川に輝く土木と建築が融合した建物達

同時期に建設された建物は、川に面して今でも他に3棟残っている。日本橋袂にある野村証券ビル（現・日本橋野村ビル）、下流に向かって江戸橋倉庫ビル（現・日本橋ダイヤビルディング）、郵船兜町ビル（現・兜町第5平和ビル）、そして日証館と並んでおり、それらの建物は川の中から直接建ち上げられたものである。そのうち郵船兜町ビルは元々は楓川に面しており、現在は高速道路が通っているために地下外側の有り様を見ることはできないが、野村証券ビルと江戸橋倉庫ビルは見る事ができる。



野村証券ビル（1930年完成）
野村証券株式会社 40年史 1966年刊
中央区立京橋図書館所蔵

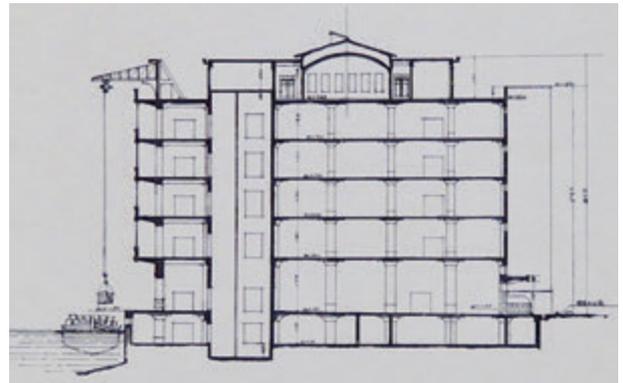
江戸橋倉庫ビルは2014年に往時の建物の中心部繰り抜くように18階建ての免震ビルに建て替えた。外郭は完成当時を復元する先進的な考えと技術を駆使したレトロフィット建物を完成させ、1階を公開空地として開放し、建設当時の図面や写真を展示して凡そ90年前の建築の考え方や技術を公開している。展示されている図面を見るとその2年前に完成した日証館とは異なり、工事周囲を木製矢板で止水した後に根伐り工事を行い松杭を

打設し、本体建物のコンクリート躯体を築造して、地下の底盤と外周壁には、ヨーロッパの建物では主流であった鉛防水を施している。

野村証券ビルは現在再開発を目前にして調査が行われていると思われるが、水の中から直接建ち上がっているのだが水との関わり方が日証館型なのか江戸橋倉庫型なのかの発表が待ち遠しい。日証館とこの2つの建物を河川治水と環境土木に権威を持つ中央大学の山田正教授に比較分析を依頼したところ、日本独自の考えて川の中から直かに建ち上げる構法を考えた当時の土木と建築を融合させる技術力に高い評価が与えられた。



江戸橋倉庫ビル（1930年完成）中央区立京橋図書館所蔵



江戸橋倉庫ビル断面図 図面に描かれているように荷物を屋上クレーンを使って船から直接搬入していた中央区立京橋図書館所蔵



2014年に日本橋ダイヤビルディングに生まれ変わった江戸橋倉庫ビル 撮影 阿部彰



高速道路に覆われる日本橋付近の日本橋川



日本橋～兜町の航空写真（2013年頃）撮影 国際航業



日本橋川に面して建つ近代建築群（1931年撮影）
三菱倉庫所蔵

日本橋に空を取り戻すと青空から見えるもの、そして・・・

日本橋に青空を取り戻すことをキャッチフレーズにし、構造体の老朽化も激しいとして、高架道路撤去の検討が行われている。前提条件は都心環状線はモビリティ社会が変化しようとしているにも拘わらず、オフィスビルの都心集中によって依然として必要なものとして位置づけ、都心の特区再開発による基準緩和を受けて、ビル建設の負担で地下トンネルを構築し神田橋から江戸橋までを撤去し、地下道と既存の高架道路と結ぶ構想である。残される高架道路は同様に老朽化していることは当然であり、それらを含めた改修の将来ビジョンは説明されていないことに一抹の不安が抱かれる。日本橋上空の高架道路が取り払われることに反対するものではないが、高速道路がなくなった後、空から川がどのように見えるかは、重要なテーマである。江戸橋ジャンクションを挟むように

建つ日証館と日本橋ダイヤビルディングに、今回の高架道路撤去計画がどんな影響を与えるかにも不安がある。

伊勢湾台風の高潮被害の教訓を受けて1970年代までにコンクリートのカミソリ堤防が完成し、90年前に土木技術と建築技術を合体させ、川から直接建ち上がっていた建物の足元部分が隠されてしまった。現在の土木界では多くの技術開発が進んでおり、高潮や洪水時に浮き上がる堤防を造ることは然程難しくなく、平常時は堤防がなく近代の街づくりの遺構ともいえる建物の足元を見せるような、過去の文化と技術を評価しつつ水辺に向けた街づくりを推し進め、さらに船着場や親水テラスなどが整えられると日本橋川の景観はさらに魅力的になる。

さらに忘れるまでもなく凡そ10年前、国交省の発案で地球温暖化を和らげるために、東京のヒートアイランド対策として日中は海からの風を内陸部に、夜間は陸から海方向に空気を流すことが効果的であるという理論に基づき、「風の道」が提唱され、多くの論文や実験による検証がなされた。

しかしながら海と陸との境界のウォーターフロントではタワーマンションや再開発オフィスビルが建ち並び、都心では超高容積な建物建設が盛んで風の往来を妨げる都市づくりが進行している。現実の問題として、汐留の建物群に遮られた新橋界隈をサーモメーターカメラで観察すると、気温が大きく上昇している様子が見られる。

この都心の奥に「風の道」を導く通路として日本橋川は重要かつ効果的であることも実証されている。日本橋の再開発プロジェクトで発表されているように首都高速の高架構造物が撤去され、川沿いの建物が低容積化されると、さらに効果が高くなると想定されている。今回の高架道路撤去プランが日本橋上空にとどまることなく、この川に覆い被さる全域に反映する未来ビジョンとして繋がる計画であることを願って止まない。